

シンポジウム報告と討論のまとめ

司会者 小柳 美代子

一九九七年七月十二・十三日にわたって、神奈川県
の江ノ島で第二十五回全国若手哲学研究者ゼミ
ナールがおこなわれた。以下は、そのさいに「ア
ートを哲学する」と題しておこなわれたシンポジウム
の報告である。

シンポジウムは二日目の七月十三日午前中から、
まず大阪外国語大学の甲田純生氏、一橋大学の三崎
和志氏、資生堂ビューティサイエンス研究所の石田
かおり氏の順で報告がおこなわれ、その後昼食をは
さんで、午後からはパネリスト相互の質疑応答、フ
ロアをまじえた討議がおこなわれた。七月の江ノ島
ということで、日頃の都会の喧噪にうんざりした頭

を休めるべく、夏の海の潮の香を楽しみにして出掛
けた司会者であったが、当日は前日からの雨模様が続く、あいにくの天候だった。それでも女同士で温泉に入り、一晩いろいろな話をするのできるのは、やはり宿泊つきの若手ゼミならではのものだろう。

シンポジウムの方は、途中パネリスト相互で白熱した議論が戦わされるなど、かなり熱の入ったものになったのではないかと思う。フロアからもさかんに質問が浴びせられ、かなりの盛り上がりを見せたと思う。また今回は芸術がテーマになっているということもあり、三崎氏や石田氏はスライドやテープなどを駆使して、視聴覚的にも刺激的にわれわれを

楽しませてくださった。拙い司会で恐縮でしたが、報告者やフロアの質問者、世話人のかたがたなど、参加者のかたがたのおかげで、シンポジウムの方は意義深いものになったのではないかと思う。この場を借りて深く感謝いたします。

報告の方は、まず甲田氏が「美と芸術の形而上学の系譜」と題して、いまや「芸術の形而上学」において「芸術それ自身が問いと化している」という状況を指摘することで、シンポジウムの口火を切った。氏は、まずアドルノの「芸術にかんすることidem自明なことはもはや何ひとつないことが自明になった。……芸術の生存権すらも自明でないことが」という言葉を引用して、現代を「西洋近代に誕生した芸術のパラダイムが根底から崩壊する時代」ととらえる。そしてこのパラダイムを支える芸術の自明性の四つのモメント、すなわち①美、②創造的行為、③表現、④作品のうち、とくに「美」のモメントをとりあげ、それをカント、フロイト、バタイユ、ハイデガー、ヘーゲルらの芸術論とつきあわせて論じ、美学的・哲学的問題を浮きぼりにした。そして氏は、こゝ

で問題になっているのが「自然と人間とのあいだの親和性」と、その「根拠」としての「絶対者」という「西洋美学の根本モチーフ」だとし、こゝから「芸術の時代の終わり」を説くヘーゲルの「芸術終焉論」へと至る。これらによって、最終的に氏は「ひよつとするとこれまでのすべての芸術理論は芸術をとらえそこなっているのかもしれない」「はたして芸術は哲学的考察によってとらえられるのであろうか」という、非常に啓発的かつ根源的な問いを提起した。

甲田氏のこの根源的な問いを受けるかたちで、引き続き三崎氏が「老いと美——アドルノ、ドヴォルジャックの『晩年様式』論」と題する報告をおこなった。こゝで氏はアドルノのベートーヴェン解釈、ドヴォルジャックのミケランジェロ解釈をとりあげ、アドルノとドヴォルジャックとの両者が「晩年様式」という新たな概念を提起している、とする。この「晩年様式」とは、それぞれの天才的芸術家の盛期の作品と比べて晩年の作品が「主観的要素の退いた、断片的・非完結的性格を帯びる」ことを意味する。これは例えば「主体が現象を放任することにより、そ

れによって現象がはじめて語るようになる。「アドルノ」というような、新たな芸術の可能性を含む概念であり、三崎氏はこの「晩年様式論」が「古典主義的芸術理想と対極に位置する美のイメージを確立しようとするものだ」とする。そしてこのような「晩年様式論」がひろく「古い」にかんする価値観の転換にも資するところがあるとし、さらに現代芸術の特性を論じるうえで重要な示唆を与えてくれる、とする。この三崎氏の論述により、甲田氏の説いたような「近代芸術論のパラダイムの根底的崩壊」が、たんに歴史的流れであるというにとどまらず、じつはひとりの芸術家それ自身のうちにおいても生じうるような「それまでの様式の崩壊」という事態でありうることを、われわれは提起される。ここにおいては、古典的で形式的に完結した一切の様式が崩壊する。そしてそれはまた、そのような様式性にとつた従来の芸術・芸術論自身の崩壊をも意味する。でははたして、歴史的にも、また個人のうちにおいてさえも生じてきうる、この「芸術および芸術論それ自身の崩壊」の時代に、いったいどのような新た

な「芸術・芸術論の可能性」がありうるのだろうか。このような問いに一つの重要な示唆を与えてくれたのが、続く石田氏の『「アート」を哲学する「アート』とは何か？』がもとめる美的価値とは何か？』と題する報告である。ここで氏は「そもそもアートとは何か」という問いを立てる。氏が「芸術」という言葉を使わず、あえて「アート」と言うのは、この問いにおいてすでに、これまでの「芸術・芸術論」とどまらない新たな「芸術の可能性」自身が問われていることを意味する。氏はまずアートという語のエチュモロギーをおこなうことによつて、元来ギリシア語のテクネー、ラテン語のアルスは「自然に人手を加える技術」を意味したのであり、「芸術・作品・芸術家」という概念自身が西洋近代になって生じてきたものであることを確認する。そしてこのような西洋近代の芸術概念の枠を超えるものを考察することによって、「アートとは何か」という根源的問いに解答することを試みる。氏はこのような枠を超えるものの例として①コンテンポラリーアート②寺院・工芸品等を含む非西洋のアート③化

粧・ファッション④流行を分析し、ここから「自分がアーティストであつて、同時に観客である」という「プロシユーマー・ヒロイン現象」という構造を取り出す。さらにここから氏は「みたて」「したて」「やつし」という概念を導入することにより、時代がこれまでの「したて」から「やつし」へと変化しており、これは「アーティストと鑑賞者とのホーダレス化」を意味する、とする。これは多様な美的価値の共存しうる時代であり、氏はここに「従来の『芸術』『アート』の概念の変更」の可能性を見るのである。

以上の三氏の報告を受けて、ついでフロアをまじえてさかんな質疑応答がおこなわれた。名古屋大学の久保田進一氏からは、石田氏の「すべてが芸術家」という概念に対して、石田氏が所属する資生堂の商業戦略との連関を問う質疑がなされた。これに対して石田氏からは、「サクセスフル・エイジング」というテーマが「若さ」というような一元的美的感覚への逆転を提起しているという、興味深い指摘がなされた。また法政大学の知野ゆり氏からは、ヘーゲル美学における「自然美の対象に自己を対象化する」

こととしての「芸術美の可能性」にかんして質疑がなされた。さらに早稲田大学の森禎徳氏からは、石田氏に対して、流行現象とのかかわりで「アートとモードとの区別」を問う質問がなされた。そして埼玉大学の渋谷治美氏からは三崎氏に対して、フロイト、バタイユらの「芸術はリビドーである」という説と三崎氏の「晩年様式による芸術の破壊」という説との連関を問う質問がなされた。これに対し三崎氏は「衰退のうちに美を見る」ということとの連関で応じた。さらに一橋大学の干場薫氏からは、まず甲田氏に対して、カント以来の芸術論の流れと甲田氏の取り上げたフロイトの芸術論とがはたして結び付きうるのか、という問いが提出され、また石田氏に対しては、ヘーゲル以後絶対者と芸術との連関という流れが終息し、美が商業資本と結びつくようになったのが現代ではないかという、興味深い指摘がなされた。さらに東京農工大学の亀山純生氏からは、石田氏に対して、「みたて・やつし」という石田氏の論と和辻哲郎の庭園技術論とのつながりが問われ、さらに「みたて・やつし」ということが古来神的な

ものと連関していたはずだとの指摘がなされ、それとの連関が問われた。これに対し石田氏からは、この「みたて・やつし」という概念は石田氏独自の意味で使用されているものであり、そのような連関はないとの応答があった。さらに亀山氏が「もともとあったものを変化させる『くずし』という概念との連関を問い、石田氏は、それは氏自身の「そぼみ」という概念に該当すると答えた。最後に東海大学の松本俊吉氏から甲田氏に対して、古代ギリシアで美はテオリアと関連しており、またガリレオでは「自然は神の言葉」とされたと指摘され、美と自然認識との関わりについて興味深い質疑がなされた。これからフロアとの質疑応答、さらに報告者同士の質疑応答により、シンポジウムは芸術の本質について「共に問う場」になったのではないかと思う。

今回のシンポジウムのテーマが「芸術を哲学する」ではなく「アートを哲学する」だったのは、すでに述べたように、現代がこれまでの「芸術・芸術論の崩壊」を意味する時代であり、ここにおいて新たな「芸術の可能性」が問われなければならないというこ

と、そしてその手掛かりとしてこれまでの芸術概念にとらわれない広い意味での「アート」が追究されねばならない、という認識からであった。甲田氏、三崎氏、石田氏の各報告は、このような現代芸術の状況を浮きぼりにし、なおかつ新たな「芸術の可能性」を問う手掛かりを与えてくれた、非常に有益な報告だったと思う。しかも、この「アートを哲学する」というテーマにおいて問われているのは、たんに芸術論の領域にとどまらない、根源的問いを含む。すなわちここでは、芸術と哲学とのそれぞれにかんして、その本質が問いにさらされているのである。

プラトン、アリストテレス以来、カント、ヘーゲルと続く流れのうちで、哲学と芸術との連関はその両者の本質的部分で問題にされてきた問いである。言い換えれば、哲学と芸術とはその両者の連関というしかたで問うことにより、かえっておのおのの本質が明らかになりうる領域だと言っている。したがって今回の報告者の三氏によって浮きぼりにされた「従来の芸術・芸術論の崩壊」という事態は、逆に、芸術にとどまらない「従来の哲学それ自身の崩

壊」という事態を明らかにしうる。例えばハイデガーが問いただしたような「従来の形而上学・哲学の終焉」という事態が現代の哲学状況において真に生じてきているとするなら、ここにおいて問いにさらされているのは「哲学それ自身」の本質である。そして現代のハイデガーにおいても、さらにまた例えばベンヤミン、アドルノ、西田幾多郎らにおいても、「哲学それ自身の本質」を問うことにおいて芸術に高い評価が与えられているのは、偶然ではない。ここでは新たな「哲学の可能性」が「芸術の可能性」といわばパラレルになっているのである。例えばハイデガーにおいては「哲学の方法としての言葉」への問いを尖鋭化することによって、「言葉との本来的関わり」としての「詩」から「従来の形而上学・哲学の終焉」の後の新たな「思索の使命」の可能性が読み取られている。つまり、従来の形而上学の言葉や概念にとらわれない「詩人」において、「言葉それ自身が語る」という事態を人間が「聴き取る」という根源的事態が生起しえ、ここにおいて「伝統的形而上学ではとらえきれない事柄がとらえられうる」と

されるのである。だが、芸術の本質はハイデガーが重視した「詩」にとどまるものではない。芸術においては、それ自身「身体」という「根源的物性」をたずさえた人間的自己と物との根源的関わりが可能になりうる。もしわれわれが「哲学それ自身の本質」を「自己と世界との関わり」という原初的かつ根源的次元にまで立ち返って問うとしたら、そこにおいて生じてきうるのは、ひよっとして従来の様式では哲学とも芸術とも区別しきれない「自己と世界との根源的な関わり」かもしれない。そしてそこにこそ、おそらくは「哲学と芸術との新たな可能性」が生じうるかもしれないのだ。

(こやなぎ みよこ 早稲田大学)